オランダとデンマークにおける英語教育視察と モンテッソーリ・メソッド教育の潜在的可能性

English Education Inspection in Holland and Denmark and Educational Potentiality Seen in the Montessori Method

須　部　宗　生

はじめに
Ⅰ．北ヨーロッパ（オランダ・デンマーク）における英語教育視察
Ⅱ．オランダにおける視察
Ⅲ．デンマークにおける視察
Ⅳ．オランダ・デンマークの英語教育の特徴
Ⅴ．様々な能力を育むモンテッソーリ教育
Ⅵ．アクティブ・ラーニングのためのモンテッソーリ・メソッドと
　　小中高教育との連携を視野に入れた大学教育改革
おわりに

はじめに

筆者は平成21年～22年にかけて科研費の助成を受け、中国、韓国、台湾、ロシアなどに赴き現地の「小学校英語教育」の状況を調査し[1)]、翌年の平成23年に日本で公式的に導入された小学校英語教育のための有効な提言を試みてきた。が、その後遅々として進歩が見られない日本の小学校英語教育に失望を覚えつつ、当テーマに関する研究調査からしばらく遠ざかっていた。しかし今年（平成28年）の春に、世界で最も英語教育が成功しているとの定評が高い、オランダ及びデンマークを訪問する機会を得たことで改めて両国が、どのように実践的な英語運用力を身につけているのか、その視察報告を兼ねて考えてみることにした。因みに63か国の75万人が参加して行われる、The English Proficiency Index（ＥＦ英語能力指数）の2014年度のランキング結果によると、1位がデンマークで2位がオランダであった。両国は非英語圏でありながら、特にオランダでは国民の約8割が英語でのコミュニケーションが可能であると言われ、筆者も今回の滞在中に街角で買い物や観光をする際や、タクシーや電車に乗る場合など、現地の言語を知らなくても、英語ですべて用が足せる便利さを両国で体験した。このことは、両国の英語教育は国家的に成功している証拠でもあろう。オランダ、デンマークは共に小学校3年生から第1外国語としての英語教育を開始する。この開始年齢自体はその他の多くの国にもほぼ共通しており取り立てて珍しいことではない。しかしこの両国の英語教育（その他の教科の教育でも同じだが）に関して特に注目されることは、単なる結果として得られる運用能力だけではなく、将来子供が社会に出てから発揮できる問題解決力、コミュニケーション力、交渉力などの能力も合わせて重視している点である。とかくＰＩＳＡの結果が重視されがちであるが、このようないわゆる学力試験の結果は社会に出てからは必ずしも有効であるとは限らないようだ。もちろんＰＩＳＡの結果も悪いわけではない、オラ

1) 須部宗生「日本における小学校英語活動の展望 -2年後に迫った日本の小学校英語活動を実りあるものとするために-」静岡産業大学論集『環境と経営』第15巻第1号　2009年6月、他論文、書籍4点

ンダやデンマークは、社会で実際に発揮できる能力を生徒に与えることを第一義としているようである。従って、今回の視察を、単に英語教育の考察だけに限定せずに、昨今特に日本で取りざたされている「アクティブ・ラーニング」の導入による学生のコミュニケーション力、問題解決能力、発案力を養成する必要性に絡めて本小論にて考えてみたい。なぜなら、今回の両国での英語教育視察、および特にオランダで見たモンテッソーリ・メソッドに、英語教育のみならず、大学教育全般に渡るアクティブ・ラーニングのための改革の上でも大きなヒントと教育上の可能性が秘められていると感じられたからである。

Ⅰ．北ヨーロッパ（オランダ・デンマーク）における英語教育視察

平成28年3月28日から約1週間、年度をまたぐ形で、全英連主催の「北ヨーロッパにおける英語教育視察」に参加した。以下その訪問日程である。

日程・訪問先

3月28日(月)：成田空港発アムステルダム空港着

3月29日(火) 午前：オランダアムステルダム市エルッカリック・モンテッソーリ小学校訪問

同日午後：デンバーグ市モンテッソーリ教育委員会訪問

3月30日(水) 午前：アムステルダム市ダルトン中等学校（ダルトン式）訪問

同日午後：自由研修

3月31日(木) 午前：アムステルダム空港発コペンハーゲン空港着

同日午後：ピーレゴー・スコーレン公立小中学校訪問

4月1日(金) 午前：コペンハーゲン市ウアスダッド・ギムナジウム公立高校訪問

4月2日(土) 午前：コペンハーゲン空港発アムステルダム空港着

同日午後：アムステルダム空港発

4月3日(日)朝：成田空港着

Ⅱ．オランダにおける視察

まずオランダでの訪問視察の内容を順に概観し、そこで得られた印象及び感想を述べたい。

①エルッカリック・モンテッソーリ小学校
高学年クラス

3月29日（火）午前に、アムステルダム市にあるエルッカリック・モンテッソーリ小学校を訪問した。当小学校ではポール・モス校長と授業を見学させていただく女性の先生（Ms. Nienke Leijte）への挨拶を済ませた後、間もなく日本では比較的珍しいモンテッソーリ方式による、２つの英語の授業を見学した。最初に小学校の高学年クラス、その後低学年クラスを見たが、いずれにクラスでも、日本やアジアの小学校のようにクラス編成が厳密に学年別によるものではなく、年齢の異なる生徒が集まってクラスが作られている。このように、年齢の異なる者から学び合うことにもそれなりの教育的効果があるようだ。聞くところでは、小さないさかいは生徒同士にあるのだが、年上の者が下の者をいたわる気持ちが育ち、下の者は上の者を慕い、尊敬するようになるという望ましい傾向が生まれるようだ。

この高学年クラスであるが、クラスサイズは、20名ほどであり、その後訪問したその他のクラスも多くて20名ほどで筆者がかつて見学した特に中国における英語のクラスの50名とはかなり異なる[2)]。まずこのモンテッソーリ・メソッドによる教育で特に印象的であった点は、質問の答えが必ずしも、一つだと決まっているわけではないことであった。例えば、資料として頂いたハンドアウトでも、What would you do if you got lost in a forest?に対しては、１）I would look at the sun or stars to work out the right direction to go. ２）I would sit under a tree and wait for help. ３）I would sit under a tree and cry. ４）Others.などがあった。

2) 淺間正通編著『小学校英語マルチTIPS』須部宗生「諸外国の実際を知るグローバルＴＩＰＳ　中華人民共和国編」東洋館出版社　2011年12月　p.187 ll.4~5

また当日の授業でも、ある物語の続きを生徒に推測させるというくだりがあったが、「失望した物語の主人公は帰宅してどうしたか。」などという問いに対しては、１）家族に自分の不満な感情を訴えた　２）日記に自分の悔しい気持ちを書きつけた。３）親しい友人に電話して自分のがっかりした気持ちを聞いてもらった。などがまず生徒に配布されたハンドアウトの選択肢にあり、生徒はこのどれかを選ぶことができる。と、ここまでなら日本でも見られる普通の授業だと思われる。しかし日本と異なる点は、１）２）３）を答えた生徒から、教師が期待することは結果としての答えとしてのではなく、どうしてあなたはその答えを選択したのか、理由を言わせることにある。もちろん正答は特にあるわけでなく、どれでもいい。そしてさらに、答えはこの3つに限定されることなく、その他の第4、第5の答えも大いに結構なのであり、重視されるのは、なぜそのように考えたのかを説得力を持って答えられるかであるという点が筆者には新鮮な驚きであり、誠に印象的であった。実際、ある女生徒は、「気分がすぐれなかった自分の気持ちをすっきりさせるために、この主人公は人気女性歌手の歌に合わせて家で踊りまくったに違いない。私も気持ちが沈んでいる場合には踊りまくるのよ。」などとみんなの前で、そのような行動を選択した理由も含めて発表した。すると先生は彼女の回答を大いに評価したうえで、「じゃあ、あなたのその時のダンスのステップを私たちみんなに少し見せてくださいな。」などと彼女に依頼した。するとその女生徒はみんなの前でそのダンスのステップを軽やかに披露した。これに対し、みんなは笑顔で拍手喝采した。ダンスを披露した女生徒は自分を回りが認めて喜んでくれたのを感じたようで、満面の笑みを浮かべ得意げな表情を見せたのだ。要はこのように、どんな答えでもいいからその生徒自身が思ったこと、したことを自分独自の表現で、他者に訴えることが重要なのであろう。とかく日本の小学校などでは答えが１つである場合が多く、合っていればよし、合ってなければだめ、で終わってしまう。しかしこのような答えが一つに決まっている教育では、一人一人の個性を引き出すことが難しいだろうし、自分自身で考えたことを相手に訴える機会も少なくなり、そうする能力も育たないのではないだろうか。その点、モンテッソーリ・メソッドでは、常に自分自身の個性的な答えを自分で考え出し、理由と共に分り易く他者に伝達する訓練をすることでコミュニケーション力、問題解決力、交渉力などが自然と育成されやすいのであろう。

また今回の見学でオランダの小学生の英語力と基本的な知識を確認する意味で、また今回の視察の機会を与えていただいたことに対する筆者なりのお礼になればと考え、授業担当の先生に10分ほど時間を頂き、10 Questions on Japanと題して、筆者がクラスで披露したがその結果と感想について述べたい。因みに生徒たちに配布したハンドアウトは以下のものである。

10 Questions on Japan

Q1. What is the capital city of Japan?
　a）Osaka　b）Tokyo　c）Hiroshima

Q2. How many islands basically make the Japanese Archipelago?
　a）four　b）five　c）six

Q3. What is the special food the Japanese people eat on the New Year's Day?
　a）kimchi　b）soba　c）rice cake

Q4. What is the national flower of Japan?
　a）cherry blossom　b）rose　c）tulip

Q5. What is the most popular sports in Japan?
　a）baseball　b）ice hockey　c）rugby

Q6. Which religion influenced the Japanese culture most?
　a）Christianity　b）Buddhism　c）Islam

Q7. Which animation of these was produced in Japan?
　a）SpongeBob Squarepants
　b）Pocket Monsters　c）Batman

Q8. What is the natural disaster that caused a huge damage to Japan on March 11th, 2011?
　a）earthquake　b）typhoon　c）tornado

Q9. Who is the best-known Dutch judo champion in Japan?
a) Willem Ruska　b) Anton Geesink
c) Peter Aerts

Q10. Which country traded with Japan even in our time of 17th-18th century Seclusion?
a) USA　b) United Kingdom
c) the Netherlands

このクイズは英語のハンドアウトを生徒全員にその場で配布したものの、ゆっくり読む時間もなく、すぐその場で各質問を筆者が読み上げていき、最小限の考える時間を与えた後、各質問の答えをa)b)c)別に生徒から挙手を求め、その場で正答を解説していった。その結果、正答率が高かった質問は、Q1, 2, 4, 6, 8, 10であり、高学年生とは言え、当初の予想に反して意外に地理や歴史的な基本的な事実に対するオランダの小学生の理解度は高く、正確であると感じた。正直言えば、自ら考え意見を他者に発信する活動を重視する教育の唯一の欠点として基本的な知識不足がありうるのではないかと筆者は考えていたのであった。しかしこれは筆者の単なる偏見に過ぎず、この考えは大きな間違いであると再認識する結果となったのである。聞くところではオランダの歴史教育も盛んであるようだし、現地の歴史博物館でも日本の江戸時代の鎖国の中でも交易していた出島のレプリカも大きく展示されており、多くのオランダ人が見入っていた。これは筆者なりに考えた理由づけであるが、オランダ人たちが大航海時代にその他のヨーロッパ列強に競り合って、アジアに進出していった歴史を国民として誇りにしている証ではないか。またQ8.の東北地方大震災に関しては全員がよく知っており、改めて全世界に与えたインパクトの大きさが再認識された。逆に正答率の低かった質問はQ3, 5, 7,9であった。キムチを日本の食べ物だと思っている生徒も多く、野球は見たことがない者も多く、世界で有名なはずのポケモンは全員が知ってはいたが、特に日本で製作されたという事実は知らないようで、今後日本はより積極的に日本の文化としてのアニメを発信していく必要性を改めて感じた。また１９６４年の東京オリンピックの柔道の重量級チャンピオンとなったヘーシンクを知らない小学生も多く、さすがに世代の違いを痛感せざるを得なかった。「ヘーシンクはオランダの生んだ皆さんのヒーローですから是非覚えていて誇りにしてください。またこのことを家に帰って皆さんの家族に伝えてください。」と筆者が生徒に訴えると、ニエンケ先生も今は亡きヘーシンク選手の偉業をたたえ、筆者の願いを重ねて生徒に依頼してくださった。

しかしながら、このクイズをしながらさらに、改めて痛感することになったことは他にもある。それは、オランダの小学生にとって母語でなく、外国語としての英語で、突然その場で行ったクイズにいとも容易く理解し、反応できるという彼らの英語運用能力の高さであった。今回のクイズを通し外国語である英語を常に自然に駆使してコミュニケーションを図ることに日常的に慣れっこになっており、そのことを当然視しているオランダの小学校英語教育に対して脱帽する結果となったのである。

低学年クラス

次に低学年クラスを見学した。こちらもクラスサイズは20名弱であるが、教室を見てまず日本の小学校のものと異なると思われる点は、まずテーブルが５つばかりありその周りに椅子が置いてあることであり、この点は筆者が韓国で見た状況と重なる[3]。しかしながら、他の国とも大きく異なる点は、特に生徒の個別の座席は決まっていないし、授業中に自由に自分の判断で席を移動したりすることができることである。例えば先生の顔をもっとよく見たいと生徒本人が判断すれば、先生のそばに移動したり中には先生のすぐ前に寝そべって先生を見上げる生徒さえもいる。慣れない者には、この様子は一見すると規律が不足していて統制ができていないような印象を与えがちである。しかいよく観察してみる

3) 須部宗生「韓国に学ぶ小学校英語活動-ソウル市ヒョゼ初等学校視察訪問を中心にして-」静岡産業大学論集『環境と経営』第16巻　第2号　2010年12月　p.40 r. ll.33~36

と、このモンテッソーリ学校ではすべての活動が生徒の自主判断と自己責任に支えられているのである。つまり、その上で授業運営や学校生活の中にそれなりのルールがあり、生徒たちはしっかりとそのルールの意義を理解して守っているようだ。例えば、トイレやその他の目的で教室を出たい生徒は、入口に置いてあるペンダント型のマークを首にかけて出ていき、用が済み教室に戻る時はそのマークを所定の場所に戻す。また授業中に先生に質問をしたり発言をしたい生徒は人差し指を１本立ててその意思を示すがなかなか先生がそれに応じてくれない場合でも、辛抱強く指を上げ続けて機会を待つ。日本などに見られがちな教育のように有無を言わせず、生徒の心からの理解や同意の気持ちもなしに、ただ従わせようとするのではなく、ここではまず生徒にルールを納得させた上で、自己管理能力をつけさせているようだ。この教育原理は単に学校のみならず家庭、職場、公共の場など社会のすべての場所で、国家的レベルで、伝統的に行われているようである。そして国民全員がこの価値観を共有している故、常にこの原則はぶれることはない。さらに価値観を国家的に共有しているので、内容の良し悪しに関係なく、すべての情報が余すところなく公開される。どこかの国にありがちなように、学校が学校内で起きた問題を公にしないようにすることなどは、この国ではまずありえないし、問題があれば余すところなく教師や学校当局が親にも伝える。この場合、親は一教員の非を責めることなく、労力を惜しまず子供のために学校とことん話し合うそうである。生徒もこのことをよく理解していて、親も学校も自分の味方だと感じ、先生にも親にも隠し事をすることが少ないようだ。その結果いわゆるモンスターペアレントはオランダにはいないとのことであった。尤もこれは後述する、モンテッソーリ教育委員会での講義によって明らかになるインスペクター制度によって支えられているようだ。とにかく、どうやら、日本は、教育技術やカリキュラム内容の検討以前に根本的に考え治さなくてはならないものあるのではなかろうか。

いずれにせよ、このモンテッソーリ小学校における低学年の英語授業では、「四季の変化」がテーマとして進められた。特に気温、気候、野山の動植物の生活の変化を英語の基本的な文で理解させた。例えば、春の説明だったら、It's spring now and it is warm. It isn't cold any more. Butterflies fly in the air and frogs start to jump in the field. などである。生徒たちは教師の提示する電子黒板を見ながら質疑応答を繰り返す。そしてその際に印象的だったことは、質問や応答の英語の文を身体でリズムを取りながら音声を発していたことだった。筆者は興味を持ち後で聞いてみたところ、これは「リトミック」であり、特にモンテッソーリ・メソッドではこのリトミックを重視しているとのことだった。確かにこれはクラウスの言うところと一致する。即ち、「感じる心から感性が育まれ、知恵が目覚めて人が人らしく育っていくのです。リトミックではこの感覚や感性がとても大切な要素となっていきます[4]」と述べている。

またその他として筆者の印象として残ったこととして、低学年クラスでは理解が遅れた生徒にはサポーター役の教師が特別に授業中に付き添って理解を助けていたことがある。これは筆者が中国でも見届けたことと一致するものの、中国の場合のサポーターは学校当局の許可を得ている生徒の親だった[5]。またこのモンテッソーリ学校では、むやみに競争原理は取り入れることはしていない。このことは筆者の調査した積極的に競争原理を導入して教育効果をあげようとする、中国の英語教育とは大いに異なる[6]。ここオランダでは、特に低学年では学力試験のようなものも行わず、原則として成績もつけないとのことであった。

---

4) クラウス・ルーメル『モンテッソーリ教育の道』学苑社1999　p.241 ll. 17~18

5) 須部宗生「中国に学ぶ小学校英語活動-大連市東北路小学視察報告を中心に-」 静岡産業大学論集『環境と経営』第16巻第1号　2010年6月 p.35 r. ll. 19~25

6) 須部宗生 「中国に学ぶ小学校英語活動-大連市東北路小学視察報告を中心に-」 静岡産業大学論集、『環境と経営』第16巻第1号、2010年6月p.29 l. l.34

②モンテッソーリ教育委員会訪問

午前中にモンテッソーリ方式による2つの授業を見たこの日の午後には、アムステルダム市からデンハーグ市に移動し、モンテッソーリ教育委員会を訪問することとなった。因みにオランダの憲法上の首都はアムステルダムであるのだが、実際の行政や教育などの機能はここデンハーグに多く集まっているようだ。いずれにしても、あるビルの３階にあるモンテッソーリ教育委員会に行き、モンテッソーリ教員委員会の責任者である、ピーター・ワァーンダーズ氏からモンテッソーリ教育の概要に関して説明があった。具体的には、モンテッソーリ・メソッドの創始者であるマリア・モンテッソーリの生涯、思想、モンテッソーリ・メソッドの歴史、モンテッソーリ協会の沿革、また当メソッドを活用した英語教育理論、またモンテッソーリ教育学校の教員の養成と研修制度、さらには、子供たちの教育と学校での生活を監視する「インスペクター制度」などに関するものであった。彼のレクチャーはざっと２時間ほど続いたが、時差ボケによる疲れのせいか筆者は不覚にも途中で眠気に襲われてしまった。しかし特に筆者の印象に残ったことは、最後に聞いた、オランダで国家的に行われている、かなり徹底したインスペクター制度であった。とかく日本ではいじめによる自殺や少年非行の問題をひた隠しにしようとする学校当局対官僚主義的な事なかれ主義を感じざるを得ない地方自治体の教育委員会という構図がある。しかしこのオランダのインスペクター制度はどんなことでも、親、学校、教育委員会の３者がすべて秘密なく共有し、問題があればその都度徹底的に話し合って解決にあたるようである。筆者は、最初親と子と学校のこのような信頼関係は、生徒自身の人格や個性を重要視するモンテッソーリ教育自体にその源泉があると考えたのだが、それに加え、親も学校も行政側もインスペクター制度を最大限信頼し活用することによって、オランダにおける教育現場の問題は最小限に抑えられていることが分った。このインスペクター制度にも、日本は大いに参考にできる点があるのではないかと実感した。

③アムステルダム市ダルトン中等学校訪問

翌日の3月30日（水）は、アムステルダムにあるダルトン方式による中等学校を視察した。この学校には教員が互いにリラックスした雰囲気の中で集える「教員用ラウンジ」があり、教員たちはコーヒーやソフトドリンクなどを自由に飲んだり軽食を食べながら意見交換を図っていた。日本の職員室の持つ固い雰囲気が伴わない、このようなラウンジは日本でも導入すべきではないかと感じられた。いずれにしても学校に到着するとこのラウンジで授業担当者の紹介を受け、間もなく授業見学となった。

まず見学した最初の授業は、40歳前後と思われる男性教員、マサート先生による、ある課題を英語で与えられた、4名ほどの生徒で構成された5つほどのグループが、生徒各自が自分のパソコンを駆使して、他のメンバーと連携を図りながら、グループ対抗の形で答えを出すという活動である。このクラスの男女比は半々ほどであった。ここでも、生徒は学年によって構成されてはいず年齢の異なる学内の生徒が選択制で登録し参加するそうである。ダルトン方式もモンテッソーリ方式のように生徒の主体性を重視しているとのことである。一見すると最初は、生徒の間で無駄話も多く見受けられ、規律が不足しているのではないかと思われた授業ではあった。生徒の中には2 ～ 3分ほど始業時刻に遅れてくる生徒もいた。しかしそんな学生をマサート先生は遅刻したこと自体を責めることはせず、必ず遅刻した理由を熱心に生徒に問いただしていた。因みに後で先生に聞いたのだが、ダルトン方式でも自分の行動理由を常に他者に説明できることが求められるとのことであった。必ずしも生徒が提示する理由は納得のいくものではないかもしれないものの、常に根気強く行動の理由を聞きそれを答えさせる習慣が大切だとのことであった。しかしこのように当初は緊張感が不足していると思われたクラスではあったが、一旦ゲームが開始されると今までの生徒の態度が一変した。見ると

そこには積極的に、課題に向き合う生徒がいたのである。尤も、ここで行われているゲームは、淺間らの言うところの、また筆者が中国で見たクラスの座席の列対抗の「ボール送りゲームによるＱ＆Ａラリー[7]」などの単に質問と答えの文を素早く次に送っていくだけの形式の単純なゲームとは異なり、生徒一人一人がパソコンで調べた解答を4人の間で、しかも短時間で、意思疎通を常に図りながら進めていかなくてはならない、コミュニケーション力を鍛える高度なものである。

そして次に見学したクラスは女性教員、ステファン先生による英語のクラスでStudent CNN Newsの映像と共に英語音声を聞かせ、オランダ語の字幕はついているものの、多量の情報をほぼナチュラルスピードで生徒にインプットさせた後、最後はニュース内容の背景、データなどの数字的事実、原因、理由、問題点、解決策などかなり高度な内容をＱ＆Ａ形式で聞き進めていくものであった。ここでもＩＴ機器であるアイパッドを駆使してクイズ形式によって進めていくにつれ、参加する生徒の態度は真剣みを帯びた。この日のニュース内容は、「薬物乱用による死者数が交通事故死者数を超えた」とか「火山噴火による被害」などいずれも社会問題を含むものだ。いずれにしても、筆者が今までに視察見学した、中国、台湾、韓国などのアジア諸国、そしてさらには、同じヨーロッパでもロシアの英語教育ともまた異なり、オランダやデンマークの英語教育では、生徒が使う英語の文法的な誤りや不適切な語彙使用などは、最小限の助言や訂正にとどめ、文法説明やパタンプラクティス[8]による練習はほぼ皆無であった。これは彼らの母国語である、オランダ語やデンマーク語が英語という同じインド・ヨーロッパ語族に属している事実によるところが大であると思われる。その点だけから見れば、日本を初め母国語の文法構造や発想が英語のものとは根本的に異なるアジア諸国とは事情が異なることは否めない。しかしオランダやデンマークがヨーロッパは国土が小さく、歴史的にもスペイン、ポルトガル、イギリスなどの列強と対等に伍していくために、彼らが特に学問に対して大いなる情熱をもって工夫努力してきたことは確かである。特にオランダは早くから蘭学を発達させ、近代の医学や科学一般に大きな影響を与えたはずだ。また彼らはオランダのユーロポートなどＥＵのみならず、世界との交易の最前線を有し、観光資源を有効的に活用するため、特に英語教育に国民挙げて様々な工夫を施し、力を注いできたことも確かである。従って、我々も英語教育の効果の差を単に言語構造や文化的発想の違いを、安易に言い訳にしてしまうことはやめなければならない。それ程今回の視察で、彼らの教育における工夫と努力から我が国が学ぶべきことが多くあると思われたのである。

Ⅲ．デンマークにおける視察

ではここではデンマークの学校訪問について述べる。

①ピーレゴー・スコーレン公立小中学校

3月31日（木）の午前中にアムステルダムから空路、デンマークのコペンハーゲンに移動し、午後一番で１つの公立学校を訪問した。

訪問したのはピーレゴーという名前の公立学校である。聞くところではピーレゴーとは柳の木を指すようで、道理で学校の周りには多くの柳の木が茂っていた。学校に到着すると間もなく授業見学に入った。因みに、オランダでもそうであったが、ここデンマークでも学校訪問の際には、日本のように多少仰々しいと思われる校長や教頭への挨拶のようなものはほとんどない。

まず1時限はアンドレア・トライヤという

7) 淺間正通編著『小学校英語マルチTIPS』須部宗生「諸外国の実際を知るグローバルＴＩＰＳ 中華人民共和国編」東洋館出版社　2011年12月 p.185 l.11

8) 須部宗生「韓国に学ぶ小学校英語活動-ソウル市ヒョゼ初等学校視察訪問を中心にして-」 静岡産業大学論集『環境と経営』第16巻　第2号 2010年12月　p.46 r. l.22

名前の女性教師による教科書Pit Stop[9]を使用した、Endangered Animals と題する章の学習であった。ここのクラスサイズは多少大きく、22名でその内女生徒が8名だった。中には難民の子弟も見受けられた。いずれにせよ、この章の題名が示す通り、世界の動物の絶滅危惧種が授業内容のテーマである。具体的にはパンダ、コモドドラゴン、サイ、シロクマ、マウンテンゴリラ、ユキヒョウなどが登場し、それらのＷＷＦの取り組み、動物園の役割などが扱われている。先生は生徒と共に教科書内容を読み進め内容確認をざっと済ませると、生徒にWould you like to get a Komodo dragon as a birthday present?などと問いかけ、興味づけによる導入を図った。すると生徒も心得ていて中には先生はどうなのと聞き返す生徒がいた。先生はその生徒に、すかさず自分の子供時代に叔母さんからトカゲをプレゼントされ最初は戸惑いを感じたなどの経験を語ったりした。もちろんこれらの応答もごく自然に英語で行われていた。いずれにせよ、ここデンマークの学校でもオランダと同様、電子黒板が常にあり、教師はこれを活用してhabitat, WWF, endangered, protect, trap, fur などの関連語句を手際よく確認していく。その後それらの語句を文脈の中で意味や用法を確認する。その後、教師は生徒各自に対し、本章の内容に沿った質問の文を2つ作りなさいという課題を出す。生徒はこの課題に10分ほどをかけたが、多くの場合生徒は各テーブルで隣のパートナーと意見交換を測りながら質問文を考えている。教師はその間テーブルからテーブルへと移動し声掛けなどをしたり、アドバイスを与えたりした。また日本人としての筆者には珍しいと感じたことは、教師の机にはバナナ、クッキー、飲み物などが用意されていて生徒が話し合っている各テーブルに配ったことである。またAre you tired? If you are, why don't we have a few minutes' break? などと声をかけたことであった。やがて各自の質問を発表させた。その際、多少教室が雑談でざわつくことがあると、先生は、「シーッ」と声をかけ、5、4、3、2、1、とカウントダウンをする。するとこのカウントダウンが終わるころにはピタッと魔法のように全員が静かになったのだ。当然オランダと同様、ここデンマークでも文法説明やパタンプラクティスは見られず、英語を駆使して自分の考えをまとめたり相手に伝えたりすることでコミュニケーションを行う形式が主体の授業であった。

②ウアスダッド・ギムナジウム公立高校

平成28年4月1日（金）は１つのギムナジウムと呼ばれる日本の高等学に相当する学校を訪問した。まず1時限は、ドキュメンタリーを見て内容理解した後自分の意見を発表する形式の授業であった。クラスサイズは意外と小さく、女子7名、男子5名で合計12名だった。生徒の中には成人ではないかと思われる身長の高い生徒もいて、年齢を聞いてみると18歳や19歳だとのことであった。教師は女性でまずSocial Inequality in USという題のドキュメンタリーフィルムを見た後、facts, examples, statistics, background, reasons, possible effects などの内容を順に質疑応答によって確認した後、それらを踏まえ、最後にproblems と solutionsという核心へと発展させていき、生徒各自が説得力を持って相手に自分の考えを英語で訴えるという発表および討論形式の授業であった。もし疑問点や論理上の弱点や矛盾点があればその場で互いに指摘し合ったり質問し合い、質問された者は相手を納得させるまでしっかりと応答しなくてはならない。授業の内容は当然濃く高度である。聞くところでは家でも宿題という形で事前調べを行ったり、関連図書を読んでくることになっているらしい。またここでも途中で飲み物やパンやクッキーが配られていた。教師にその理由を聞いてみると、生徒は家庭では、課題で夜遅くまで忙しく勉強し、中には朝食を食べてくる時間的余裕のない者もいるので、軽食や飲み物を出している、とのことであったし、これらの費用も学校で予算化しているのだそうだ。いずれにせよ、アメリカにおける社会

9) Chris Carter & Benthe Fogh Jensen Pit Stop Topic Book / Web #5 Alinea Egmont 2007

格差問題の事実的確認から、生徒たちの討論は、折も折、米国の大統領選挙の問題に及び、活発にクリントン、トランプ、サンダーズの政策には各自がどう評価するかなどの討論が活発に行われていた。

続いて2時間目は、「英語圏に属す国」と題して英語で3分程度で生徒各自が発表するという形式の授業であった。ここでも生徒は17歳～18歳ほどの年齢で、女子9名、男子5名、合計14名の小サイズのクラスであった。まず女性の先生がスピーチにおける基本、例えば、音量、アイコンタクト、自然なジェスチャー、ポーズ、等の重要性を伝えた後、生徒各自が発表した。発表内容は英語圏に属す国々であるから、イギリス、カナダ、米国、南アフリカ、インド、アイルランド、オーストラリア、などの歴史、国状、自然、人口、社会問題など各自書籍やインターネットで事前に調べて来たものを発表していた。発表において特に生徒が注意を払っていた内容は、デンマークと比較して各国の事情はどうか、という点であった。担当教師は時折、生徒の英語の発音や語彙の選択の仕方を治すように指摘していたが、それは最小限にとどめているようで、不完全でもともかく自信を持って英語で話すことを評価していたのが印象的だった。

Ⅳ．オランダ・デンマークの英語教育の特徴

では以上の両国における英語教育視察を踏まえてその特徴をまとめるとどのようなものあろうか見届けたい。特徴は以下の５つに大別できよう。

１）オランダ、デンマーク両国の英語教育の成果の高さ
２）英語実用運用力と自分で考え発表する能力に対する力点
３）小さいクラスサイズ
４）外国語としての英語の国語的学習
５）小中高大の連携

まず１）に関しては、本小論の冒頭でも見たように、63か国の75万人が参加した2014年度のＥＦ英語能力指数の結果でも明らかである。この彼らの英語能力の高さは街角を歩いてみるとすぐ判明する。彼らは一部の人を除いて日常的に英語を使っている。筆者も彼らに「なぜオランダ人やデンマーク人は誰でも英語を話すのか」と聞いたが、その答えは「学校で学習したから」であった。改めて考えてみると、ある意味で当然な答えであるのだが、この当然なことがまかり通っていない日本の現状を考えると複雑な思いに襲われてしまった。しかしここで改めてこの問題を問いただしてみる必要があることは言うまでもない。

２）については、両国では今回の筆者の授業視察の結果でも明らかで、確かに英語の実用運用能力に力点が置かれている。しかしながら、ここでいう実用運用能力とは、単に基本的な日常会話がすらすらとできるということだけを意味しない。ここで重視されている能力とは、むしろ英語という言語で考え、問題を分析し、論理的に自らの考えをまとめ上げ、説得力を持って相手に発信し交渉する能力も含むものであることが特徴である。

３）オランダもデンマークも共通して、英語の授業のクラスサイズは小さい。最大でも20名を超えることは少ないようだ。この点で50名近くの中国は別格としても25名～30名ほどが筆者の見て来たロシア、韓国、台湾などにおける英語教育のクラスサイズと比べてもオランダとデンマークの英語の授業のクラスサイズは小さく、この小さいクラスサイズが彼らの英語授業における主たる活動である、発表や討論を最大限生かすことを可能にし、教育効果にはプラスに働いていると考えられる。

４）筆者が過去に見学した他の国での英語の授業と根本的に異なる点は、オランダやデンマークの英語の教え方は、英語が外国語であるにもかかわらず彼らがあたかも英語を自分たちの母国語、言い換えれば国語として扱っているような授業であるということである。単に教科書の内容を覚えるという授業ではなく、その内容を読んで理解したかどうかチェックして、内容をまとめたり、分析したり、自分なりの言葉で言い換えたり、コメントや意見を書いたり、発表したり、矛盾点、疑問点、問題点を挙げて討論し合ったりする。

５）そして４）の授業のやり方は、基本的

には生徒の年齢が上がっても変わることはない。即ち分析、コメント、問題点の分析、討論は内容の難易度は異なるものの、このやり方は小、中、高、大、と引きついて行われる。即ち小中高大の堅固な連続性と連携がある。そしてこの連携を可能にしている大きな要素として、オランダのモンテッソーリ教育委員会の責任者からも聞いたインスペクター制度とほぼ同じ制度がデンマークにもある。聞くところではオランダの場合ですでに述べたように、デンマークでも、自己中心的かつ理不尽な要求をするいわゆるモンスターペアレントはいないとのことである。それ程この制度は国民に定着して信頼を受けていて、子供のために親も学校も教育委員会も社会全体も何事も隠さずとことん話し合うそうである。日本でも小中連携とか高大連携と取りざたされてはいる。しかし残念ながら、まだ日本にはオランダやデンマークのように連携を強く推進できる国家的な土壌が十分に育っていないと思われる。

Ⅴ．様々な能力を育むモンテッソーリ教育

以上みてきたように英語を使いながら自分で考えをまとめ自分の意見を相手に伝え議論し合うという授業の進め方は確かに効果をあげている。しかしながらオランダの生徒や学生さらには一般国民を見るにつけ、彼らの有する高い英語能力や積極的な態度を育んでいるのは、英語の授業以外に何か他にありそうだと感じだしたのだが、それは他でもない筆者がオランダで視察したモンテッソーリ・メソッドではないかと思うに至ったのである。

確かに歴史的にも地理的にも国際化とグローバル化が早い時期に進展したオランダやデンマークがビジネスや社会生活の中で必要としたものは、相手と交渉したり議論したりする能力であったに違いない。そしてこのような環境の中でオランダとデンマークは様々な英語教育の工夫を施してきたはずである。その結果生まれたのもモンテッソーリ・メソッドと考えられる。いずれにしても、オランダアムステルダムで視察したモンテッソーリ・メソッドによる教育そのものが、グローバル化や情報化の中で、発信力や交渉力など、我々が現在必要としているさまざまな能力を引き出してくれるのではないかと筆者には強く感じられた。言い換えれば、彼らの卓越した様々な能力の源流がこのモンテッソーリ・メソッドに存在するのではないかと考えたのである。よってこの教育法の創始者であるマリア・モンテッソーリとはいかなる人物でそのモンテッソーリ・メソッドとはいかなる教育法なのかを次に概観したい。

Ⅴ-1．マリア・モンテッソーリ

まずモンテッソーリ教育を開発したマリア・モンテッソーリとはいかなる人物であろうか。H．ハイラントによれば、マリア・モンテッソーリは1870年8月31日にイタリアのアナコナ州のキアラヴァレという町で[10]財務官僚の父と大地主の娘として生まれた母の間に生まれた。同氏によればマリア・モンテッソーリは特にリベラルな考えを持つ母親の精神的な影響を受けたようである。マリアは当時としては女性の職業としては珍しかった医師を将来の職業としたいという夢を抱いたが、特に父親はこの考えに断固として反対だったようだ。しかしマリアは、母親の応援もあり女性として初めて医学校で医学を本格的に学ぶこととなった。その後彼女は人間の身体だけでなく精神に興味の対象を移し、やがて障害児教育に関心を持つようになる。また同氏によれば、マリアは1896年から1906年の10年に教育学へと転向した[11]。マリアはローマ大学やローマ女子師範学校で教鞭をとる一方、ローマのサン・ロレンツォオ地区に最初の「子どもの家」を開設し、モンテッソーリ・メソッドを教育の一環として彼女自身が実践した。1911年にはイタリアモンテッソーリ協会が設立され、マリアは教職の仕事を辞して、モンテッソーリ法の普及のために専念し出版と講演活動によって、イタリア、アメリカ、オランダ、スイス、イギリス、ドイツ

10) H．ハイラント『マリア・モンテッソーリ』東信社 1999 p.11 ll.7~9
11) 同上　p.42 ll.7~9

などヨーロッパのみならず、インドなどアジアでも認められるようになった。静岡市で「松浦学園モンテッソーリ子どもの家」を主宰している松浦氏によれば彼女の影響力は大きく、「日本ではまだまだご存じない方が多いですが、欧米では教育に大きな貢献をした人物としてよく知られています。特に、欧米の幼稚園や保育園ではモンテッソーリと看板がついていなくても、ごく自然のこととしてこの教育法が取り入れられ、実践されている場合が多いようです。また、彼女の偉大な業績はイタリアの千リラ札に肖像画印刷されていることからもうかがい知ることができます。[12]」とのことである。

V-2. モンテッソーリ・メソッド

では、モンテッソーリ教育やモンテッソーリ・メソッドとはどのようなものだろうか。モンテッソーリでまず重視していることは「国際モンテッソーリ教育101年祭実行委員会」の次の説明に約言されている。即ち、「世界の多くの学校では、字や算数は、先生が子供に教えるものでした。ところが「子どもの家」では、道具や教具の使い方を覚えた子供が、自分で字や算数を学んでいきます。絵や音楽も、自分で表現し、生き物についても、自分でしらべます。[13]」また、松浦はモンテッソーリ・メソッドでは「子どもがもって生まれた「自己開発力」という力が存分に発揮される場と出会い、そこで自己を確立していく[14]」と述べている。

また日本でモンテッソーリ・メソッドを実践しているという「友好学園草深こどもの家」の赤羽恵子氏の報告によれば、この学園で子供時代をすごした卒業生のアンケートの中に、例えば、ある女性の「人間としての基本が学べる。自己受容できるようになる。子どもの家での人間形成は、ぶれない自分を作れると思う。ぶれない自分がいれば、どんな夢も時を待てばかなえられると思う。一人の力は偉大なものだと思う。好きなことを繰り返す中で自信がつき、自立につながるから。[15]」、またこれも女性の「創造力の豊かさには今も昔も自信があります。そのおかげで私は今とても楽しく生きています。[16]」またさらに、ある男性の「常に冷静に状況を観察し、自分の位置が確認できている。他と融合しながらも個を持ち、社会の多くの場面で適応性があり、また同時に他者も認めて共生できる。[17]」などモンテッソーリ・メソッドの有効性が伺える感想が白押しである。またこのモンテッソーリ・メソッドには伝統的な、典型的な日本の教育の真逆とも言える価値観が見られるが、それは以下のように、藤原がその著の中で「モンテッソーリ教師の12の心得」として述べていることに如実に表れていると思われる。即ち、例えば、「探し物をしている子や、助けの必要な子の忍耐の限界を見守り」、「招かれたらよく聞いて」、「困っている子には近づき」、「子どもの作業を大事にし、中断や質問を避け」、「子どもの間違いは直接に訂正せず」、「休んでいる子どもや、他人の作業を見ている子どもには、無理に呼んだり作業を押し付けたりせず」[18]などである。このことは筆者が今回特にオランダのモンテッソーリ小学校で見届けた授業とも重なるように、モンテッソーリ教育には、生徒本人の学ぶ力に対する信頼と規律と自由の絶妙のバランス、とでも表現できそうなものが存在すると考えられる。とかく日本の教師は、いやおそらく日本の限らず、普通の教師ならば探し物をしている子どもにはすぐそのありかを知らせ、

---

12) 松浦公紀『幼児のちから』ーモンテッソーリ教育の現場からー静岡新聞社1998　p.14 l. l.11~p.142 l.5)

13) 国際モンテッソーリ教育101年祭実行委員会『マリア・モンテッソーリ』てらいんぐ2008 p.18 ll.2~6

14) 松浦公紀『幼児のちから』ーモンテッソーリ教育の現場からー静岡新聞社1998 p.16 ll.8~9

15) 福島喜代子「自殺対応とソーシャルワーク-つなげる実践と専門性-」ソーシャルワーク研究38(3),2012,pp.4-16赤羽恵子『自分で考え、自分を育てるモンテッソーリ教育』北斗書房2013 p.223 ll.10~27

16) 同上　p.224 ll.1~3

17) 同上 p.225 ll.26~30

18) 藤原元一他『やさしい解説モンテッソーリ教育』学苑社　2012 p.67 ll.6~10

子どもの作業中には声をかけたり、質問したり、子どもの間違いを見つければ、すぐさま指摘してしまうのだろう。筆者も教師としてそのように行動してきた。しかしこのモンテッソーリ・メソッドのように、子どもの自ら学ぶ可能性を信じ、子どもに寄り添い、忍耐を持って見守る教育から、我々も大いに参考にすべきではないだろうか。

Ⅵ. アクティブ・ラーニングのためのモンテッソーリ・メソッドと小中高教育との連携を視野に入れた大学教育改革

既に述べたように、加速度的に進む情報化、ハイテク化、雇用のグローバル化などに対処するために大学教育改革の必要性が取りざたされている。文科省は今までのような、教授から学生が一方的に知識を受ける受動的な講義形式だけでなく、学生自らが考え学習する、いわゆる「アクティブ・ラーニング」の導入を打ち出している。筆者もこれまで大学教育で教鞭をとってきた者としてこの改革には大賛成である。なぜなら、特に最近、あまり知的好奇心を示さず、ただ受動的に講義を受けているだけの学生を前にして苦心してきたのである。にもかかわらず、具体的にどのような教育上の改善を図ればいいのか分らずにいたからである。しかし今回オランダ及びデンマークの英語教育を視察して現地における教育全般の「アクティブさ」に感心をし、特にオランダのモンテッソーリ・メソッドの実際を見るにつけ、筆者なりに言えば、その背後にアクティブ・ラーニングなるものの原点を見る思いがしたからである。モンテッソーリ教育法に関しては、筆者には今まで教科書的な限られた知識しかなかった。また、モンテッソーリ・メソッドはどちらかと言えば初等教育のためのもので大学教育には関連性は希薄なのではないかという先入観が筆者にはあった。しかしその後何冊かの書物を調べてみると、マリア・モンテッソーリ自身が１世紀も前にすでにその著の中で、鋭い先見性を持って、モンテッソーリ・メソッドに則った教育のタイミングの重要性及び中高教育から大学教育の連続性、および中高教育と大学教育の連携、さらにそれによる大学教育改革を訴えていることを知った。具体的には、モンテッソーリは人間の精神的成長におけるタイミングと大学と中高の協力、相互理解、連携の重要性を指摘し、「教育の目標は、適切な時期に「種蒔き」をするために可能なあらゆる手段を見つけることです。下の学校に対する興味は、これらに関係がないと思われても、中学校、高等学校だけでなくても大学においてさえも、この「種蒔き」に関心を持たなくてはなりません。[19]」と述べ、さらに「大学教授が相手にするのは、与えられたことに何でも反対する精神の持ち主、無関心と怠惰、小ヤギのように鎖で強制的につながれた落ち着きのない青年です。正常な教育の道をたどるのであれば、そして大学が下の学校の勉強にも関心を持つようになるのであれば、生徒はいつか熱心な使徒や知的評論家になり、教授のよき協力者となるでしょう。[20]」と述べているのである。即ち、初等教育だけを対象としているモンテッソーリ教育ではなく、小中高大の大きなパースペクティブの中で位置づけられたものである。またとかくアクティブ・ラーニングのためには、学習者や学生に教師がただ課題を与えて作業させておけばいいと安易に考えられがちであろう。しかし断じてそうではない。ただ課題を与えるだけでは学習者の自主性は委縮する結果になりかねない。要は学習者を心の底から内面的にアクティブに変えることが何よりも重要だと考えられるし、そうするための鍵が、モンテッソーリの次の言葉に凝縮されていると思われる。即ち、「子供は、受容的存在として、おとなや教師が教え込んだりしつけたりするのを待っているのではなく、自分の中に成長していこうとする、内的生命力を本来持っているものである。それは、条件さえそろえば、機会さえ与えられれば、内から湧きでてくるものである。[21]」いずれにせよ、雇用のグローバル化と情報化、さらに急速に進むハイテク化の

19) M. モンテッソーリ『児童期から思春期へ　モンテッソーリの一貫教育』
20) 同上　p.140 ll.6~9
21) 同上　p. 137 ll.13~16

社会の中で将来活躍しなくてはならない学生にはこのモンテッソーリ・メソッドによる内面的革新のようなものが必要であろう。なぜならこのメソッドによって得られる能力とは１）自己管理能力　２）発案力　３）問題解決能力　４）交渉力　５）コミュニケーション能力　６）分析力　７）論理的思考力　８）対人力　９）総合的人間力　１０）情報収集力　１１）学習、課題、仕事を進めるための計画立案能力　１２）自らを見つめ知る能力など枚挙の暇がないと考えられるからである。

おわりに

今回の北ヨーロッパ訪問は筆者が予期していた以上の気づきと収穫があったと総括しても過言でない。実を言えば、フランスにおけるテロ事件や訪問の直前に起きた、隣国であるベルギーのブリュッセル空港の爆破事件で今回の訪問を取りやめることも考えた。しかし、テロ事件が直前に起きたのだからこそ、セキュリティーも強化されるはずであるから、続けてそのようなことは起きないだろうと楽観的に考え訪問を決行した。そして案の定、特にアムステムダム及びコペンハーゲンの両空港間の移動の際のセキュリティチェックは厳しかったが、結果的に無事に視察を終えることができ安堵している。いずれにしても、今回のオランダ及びデンマークの英語教育のみならず、特にオランダで見たモンテッソーリ・メソッドには教育上の大きな可能性を見る思いがした。モンテッソーリ・メソッドは一口に表現するならば、「学習者が主人公の教育」であろう。この意味で学習の主体性は学習者にあるという意味においてまさにアクティブ・ラーニングに他ならない。国際モンテッソーリ教育101年祭実行委員会編による『マリア・モンテッソーリ』によれば[22]、かの有名な『アンネの日記』の著者であるアンネ・フランクもモンテッソーリが創設した「子どもの家」に通い文字を学び、文章を書く楽しさを知ったそうである。筆者も今回アムステルダムのアンネ・フランクの隠れ家を垣間見る機会があったが、つくづくアンネ・フランクが子どもの家で学んだモンテッソーリ・メソッドこそが世界の人々を感動させた日記を書くための自らを冷静に見つめる力を彼女に与えたのではないかとの思いがした。

いずれにせよ、学生を初め日本人全体における交渉力、発言力、コミュニケーション力の不足という問題はずっと筆者の悩みの一つでもあったわけだが、心のどこかで、その原因は「沈黙は金」などを是とする、単一民族的な歴史の中で長い時間を経て培われた日本人の美徳とも言える国民性が根底にあると考えていた向きがあったことは否定できないしそれが我々が日本人学生にそのような能力をつけさせる努力を回避する言い訳になってきたようだ。しかし今回の北ヨーロッパにおけるオランダとデンマークでの教育視察によって、彼らは彼らなりにもがき最大限努力してそのような能力を育てようとしてきたことが分ることで日本における教育全体を改革していかなければいけないし、我々も工夫と努力を重ねればそのような能力のみならず、欧米人以上に身につけることは、大変ではあるが、可能ではないだろうかと考えるに至った。

参考文献等

須部宗生「日本における小学校英語活動の展望-2年後に迫った日本の小学校英語活動を実りあるものとするために-」静岡産業大学論集「環境と経営」第15巻第1号2009年6月

須部宗生「中国に学ぶ小学校英語活動-大連市東北路小学視察報告を中心に-」静岡産業大学論集「環境と経営」第16巻第1号　2010年6月

須部宗生「韓国に学ぶ小学校英語活動-ソウル市ヒョゼ初等学校視察訪問を中心にして-」静岡産業大学論集「環境と経営」第16巻　第2号　2010年12月

須部宗生「ロシアに学ぶ小学校英語活動-モスクワ市1699学校視察訪問を中心に-」静岡産業大学論集「環境と経営」第17巻第

22) 国際モンテッソーリ教育101年祭実行委員会『マリア・モンテッソーリ』てらいんぐ2008 p.21

1号　2011年6月
淺間正通編著『小学校英語マルチTIPS』須部宗生「諸外国の実際を知るグローバルＴＩＰＳ中華人民共和国編」東洋館出版社2011年12月
クラウス・ルーメル『モンテッソーリ教育の道』学苑社1999
Chris Carter & Benthe Fogh Jensen Pit Stop Topic Book / Web #5 Alinea Egmont 2007
H. ハイラント『マリア・モンテッソーリ』東信社 1999
松浦公紀『幼児のちから』－モンテッソーリ教育の現場から－静岡新聞社1998
国際モンテッソーリ教育101年祭実行委員会『マリア・モンテッソーリ』てらいんぐ2008
赤羽恵子『自分で考え、自分を育てるモンテッソーリ教育』北斗書房2013
藤原元一他『やさしい解説モンテッソーリ教育』学苑社　2012
M. モンテッソーリ『児童期から思春期へモンテッソーリの一貫教育』玉川大学出版部1997
クラウス・ルーメル『モンテッソーリ教育の精神』学苑社2004
レニルデ・モンテッソーリ『国境のない教育者モンテッソーリ教育』学苑社2000
マリーア・モンテッソーリ『子どもの発見』国土社1992
マリア・モンテッソーリ『モンテッソーリ法』あすなろ書房1970
Biography of Dr. Maria Montessori by Association Montessori Internationale